

ナシオン 国民とヨーロッパの間

フランス・ドイツ・ルクセンブルク国境空間における越境的な記憶の場： 『国民的なもの』の発見的限界に関する考察

ライナー・フーデマン

翻訳：菊池恵介

目次

I. 複数の記憶

II. 大国の狭間で

III. 越境的記憶の要因

IV. 結論：紛争と競合

I. 複数の記憶

メッツ駅を降り、やや左上を見上げると、恐ろしげな人物が見下ろしているのがわかるでしょう。獐猛な戦士の像です【写真①】。

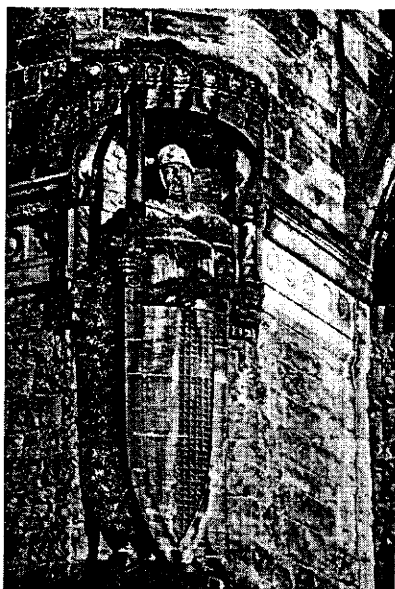
この駅が建設されたのは1908年。アルザス・ロレーヌ地方がドイツに併合されたのが、1871年から1918年の間ですから、この像は、攻撃的で陰險なゲルマン人に見えるに違いありません。それはフランス人の目に映るドイツ帝国のイメージに重なるのです。

1986年ごろ、私は1913年に出版された古いガイドブックを手に、この界限を練り歩きました。ここがドイツ領だった1871年から1918年の間に建設された建築物がどれだけ残っているかを調査するためです。持参した昔のガイドブ

ックの石像の写真と、現在の石像が別物であることに気づいたのは、そのときでした【写真②】。古いガイドブックに掲載されていたのは、温和な表情を浮かべた人物でした。当時メッツ広場に駐屯していたドイツ部隊の司令官フォン・ヘッセラーの像です¹。そこで私はつぎのように推論し、論文を発表しました。もともとの石像は、おそらく1919年頃、いまの石像に置き換えられたのであろう（第一次大戦直後、この地方の多くの石像の首が擗げ替えられました）。兵士の盾に刻まれていたドイツ帝国の紋章も、そのときにロレーヌの十字にとって代わられたのであろう。兵士の像は、ドイツ帝国を表象しているのではなく、ドイツ帝国に対するフランス人のイメージや観念を表象しているのだ、と²。

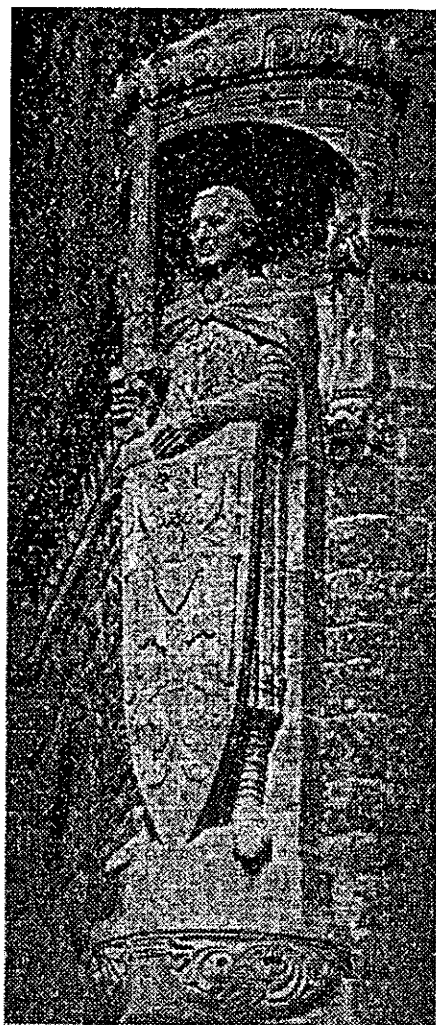
¹ H. M. Will, *Neuer Führer durch Metz und über die Schlachtfelder von Gravelotte - St. Privat, Vionville - Mars-la-Tour, Colombey - Nouilly*, Metz s.d. (vers 1913), p. 8.

² Rainer Hudemann, « Grenzübergreifende Wechselwirkungen in der Urbanisierung. Fragestellungen und Forschungsprobleme », in: id. et Rolf Wittenbrock (Hg.), *Stadtenwicklung im deutsch-französisch-luxemburgischen Grenzraum (19. u. 20. Jh.). Développement urbain dans la région frontalière France-Allemagne-Luxembourg (XIX^e et XX^e siècles)*, Saarbrücken 1991, pp. 9-20.



写真①: メッツ駅の兵士の石像（ローラン像）

ところが、その後、さらに別の写真ができました³。フォン・ヘッセラー氏の首は、たしかに1919年に切り落とされたのですが、中世の皇帝と思しき人物の首に挿げ替えられたのです。やがて1940年になり、ドイツがフランスに勝利すると、皇帝の石像は封印されました。ドイツによるロレーヌの併合後、ナチスの地方長官ヨーゼフ・ビュルケルが視察に訪れたのですが、そのとき、駅前の兵士の石像が第一次大戦のフランスの国民的英雄であるフォッシュ元帥に似ているとして物議をかましたのです。このようなものを地方長官に見せるわけにはいかない。そこで石像を封印することになったのです。そ



写真②: 1913年のガイドブックに掲載された
兵士の石像

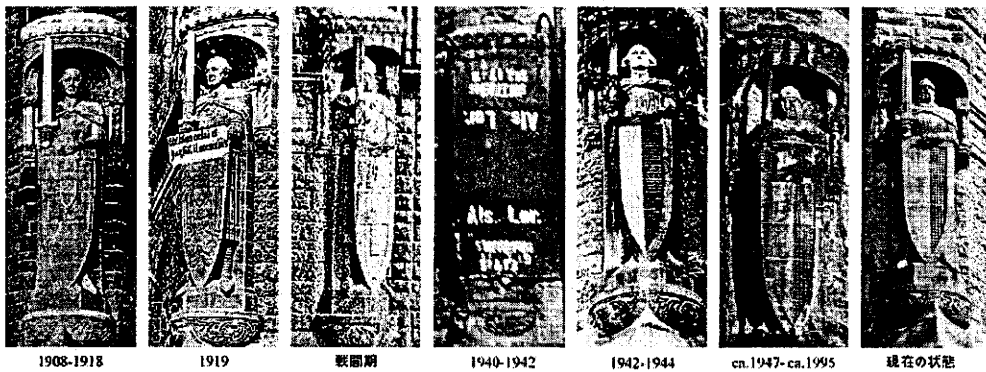
して二年後、もとのヘッセラー司令官の頭部を復元する彫刻家が見つかり、[盾の部分に]ロレーヌの十字の代わりにメッツ市の紋章が刻み直されたのです。ロレーヌの十字が抹消されなければならなかったのは、この紋章が、この間にドゴールがロンドンで指揮していたレジスタンス運動のシンボルとして使われるようになった

³ これらの写真に関しては、アネット・マース氏にご教示いただいた。

ていたからです【写真③】。

その後、1944 年から 1945 年にかけての冬に連合軍が登場し、メッツを解放します。すると、フォン・ヘッセラーの首も再び切り落とされ、あの恐ろしげな戦士の頭に挿げ替えられます。一方、盾に刻まれた市の紋章は、ドイツ人の作であるにもかかわらず、そのまま残されました。その結果、戦士の石像が何を表しているかは、何通りにも解釈できるようになりました。戦後

のフランス人が抱いていたような、恐ろしいドイツ人にも見えますし、ドイツからの新たな攻撃に対して祖国の大地を守ろうとしているガリア人にも見えなくはありません。一方、駅の上方のあのメッツ市の紋章が、じつはナチスによって刻み入れられたものであることを知る住民は、さぞ少ないことでしょう。



写真③メッツ駅の兵士の像の変遷

社会学者のフレディー・ラファエルは、別の文脈において、「複数の記憶」(mémoire plurielle)という用語を編み出しました⁴。まさにここで見られる現象を説明するのに、ぴったりの用語です。この土地はしばしば悲劇的な運命に見舞われてきましたが、この土地で繰り返された異なるナショナルな層の重なり合いや競合の歴史が、

期せずして、このメッツ駅の兵士の石像のうちに象徴されているのです【写真④】。駅の周辺地区全体が、ドイツの「美学的都市計画」の理論にもとづいて設計されています。この種の建築は、ストラスブールでも見られます。これを提唱したオーストリアやドイツの都市工学者たちは、衛生環境やインフラ整備、交通網などの点

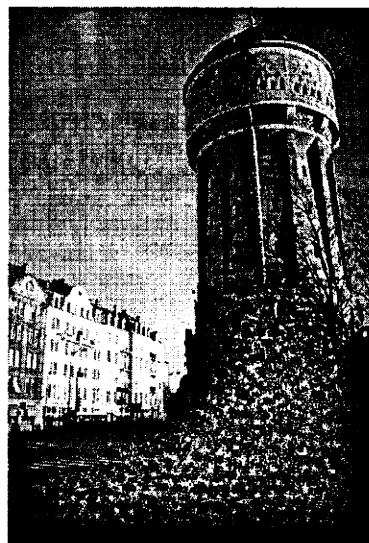
⁴ Freddy Raphaël/Geneviève Herberich, *Marx, Mémoire plurielle de l'Alsace. Grandeurs et servitudes d'un pays des marges*, Strasbourg 1991.



写真④: メッツ駅の眺め。1911年頃の絵葉書より。
兵士の石像は正面入り口の右側、中程の高さにある。

で、近代都市の要件を満たす必要を認識しつつも、よりこじんまりとして、視界も閉ざされた昔ながらの都市の形態に回帰しようとしたのです⁵【写真⑤】。また1910年ごろに設計された多くの家屋は、1920年以降になってはじめて着工されました。

この建築様式は、80年以上にわたって、ドイツへの併合を象徴するものとして市民の公の記憶から排除されてきました。ところが1990年代になると、ドイツ風建築が残るエリアとして、この地区がにわかに注目されるようになったのです。駅舎と兵士の像は磨きなおされ、当初の明るく黄色味を帯びた姿で光輝いています。大量の図版を収録した、この地区に関する本も、この間に刊行されました⁶。2007年6月8日に



Wasserturm am Bahnhof Metz
Foto: Husmann 2001

写真⑤: 駅脇のネオ・ロマン様式の給水塔。
都市衛生の象徴である。

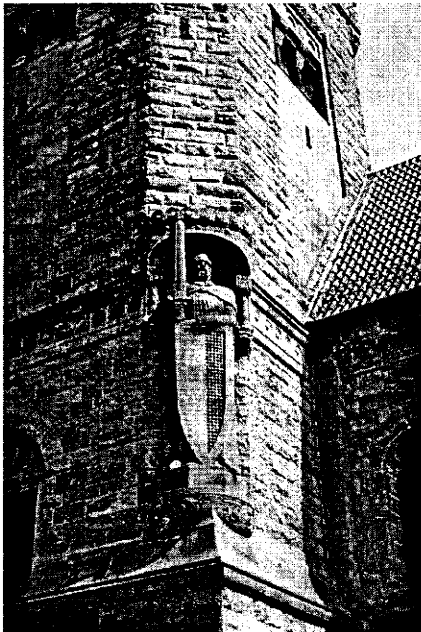
は、メッツ市の発案で、このエリア一帯をユネスコの世界遺産に登録することがフランス政府に提案されました⁷。こうして、記憶は長い紆余

⁵ Camillo Sitte, *Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen*, Wien 1889; Karl Henrici, *Beiträge zur praktischen Ästhetik im Städtebau*, München 1904.

⁶ Christiane Pignon-Feller, *Metz 1848-1918. Les métamorphoses d'une ville*, Metz 2005.

⁷ Metz. Le quartier impérial 1870-1918. 同年ユネスコの世界遺産の候補リストに登録された (Mairie de Metz, 2007)。

曲折の末、みずからの歴史のあらゆる部分を受け入れるようになったのです。1918 年以來、ドイツ時代の記憶はメッツ市の公の意識から長らく排除されてきましたが、そのタブーがようやく解かれようとしているのです【写真⑥】。この地区ほど記憶の場として公認されるにふさわしい場所はないでしょう。一見、純粹にドイツ風に見えるかもしれませんが、記憶が幾重にも重なり合い、競合している場所なのです。



写真⑥: 「浄化された」兵士の像

ピエール・ノラは、もっぱら国民（ナシオン）の再構築に向けて「記憶の場」という概念を練り上げましたが、メッツ駅の例はナショナルな枠組みを超えてしまう事例の一つだと言えます。それは、ヨーロッパへの帰属意識の土台となる「ヨーロッパ的記憶」を体現しているの

でもありません（ちなみにエティエンヌ・フランソワは、このカテゴリーを学術的な議論に導入した立役者で、本誌収録の論文でもこれに言及しています）。

国民というカテゴリーは、この駅を形成してきた戦乱の数々と深く結びついています。なぜなら、郵便局やホテルに隣接するこの駅は、平時においても市民生活の中心ですが、第一次大戦中は、司令部や軍用列車、電信局などが置かれた一大軍事拠点だったからです。にもかかわらず、国民という言葉は、この駅、地区、地域、記憶がたどってきた運命の根底にあるものを把握するのに適した概念であるとはいえません。ここではむしろ私が提案した「越境的記憶」という言葉の方が発見的な道具として有益かもしれません。

またこの例は、どのようにして記憶が埋もれてしまったり、新しい文脈のなかで力強く回帰したりするのかを垣間見せてくれます。したがって記憶の場に関する省察は、特定の時代に同時代の人々から公認されている場所に対象を限定してしまうわけにはいきません。私たちは、1996 年から 2002 年にかけて、フランス・ドイツ・ルクセンブルクの三国間で連携して、記憶の場をめぐる共同プロジェクトを立ち上げ、その成果をインターネット上で公開してきました⁸。

⁸ Rainer Hudemann/Marcus Hahn/Gerhild Krebs/Johannes Großmann (Hg.), *Stätten grenzüberschreitender Erinnerung - Spuren der Vernetzung des Saar-Lor-Lux-Raumes im 19. und 20. Jahrhundert. Lieux de mémoire transfrontalière - Traces et réseaux dans l'espace Sarre-Lor-Lux aux 19^e et 20^e siècles*, Saarbrücken 2002, 3^e édition techniquement modernisée 2009.

そこでは、さまざまな協力関係が結ばれたり、戦争がなされたりした場所でありながら、あまり想起の対象とはなっていないような場所に注目しました。[国民的な記念行事の対象となるような記憶の場よりも] 潜在力を秘めながら、人知れず眠っているような場所に読者の注意を喚起したいと思ったのです。これらの場所は一見隠れていますが、注意さえすればはっきりと見えますし、確認することもできます。ただ、そのためには適切な問いを発するとともに、一定の補足的な知識を持ち合わせていなければなりません。それこそ、私たちのプロジェクトが提供しようとしているものなのです。このサイトでは、26 人の研究者による約 200 本の記事を通じて、800 余りの建築物が紹介されています。扱われるテーマも、労働者階級や田舎風の建築物から、産業、コミュニケーション、宗教施設、記念碑、さらには軍事建築や都市計画まで、非常に多義に及んでいます。

私たちの理論的なアプローチは、さまざまな記憶のせめぎ合いが見られる他の地域でも原則的に適用可能です。このような分析方法の特徴を際立たせるには、記憶の構造化を論じるためにアライダ・アスマンが提起したカテゴリーがとりわけ有益です。それは、このプロセスの学術的探究をさらに掘り下げるための道具立てを与えてくれるように思います⁹。

II. 大国の狭間で

フランス・ドイツ・ルクセンブルクの国境に位置する地域では、さまざまな記憶が重なり合い、もつれ合っています。以下では、このような状況を生み出している二つの要因に注目し、比較検討してみたいと思います。その一つは、国境とその変容であり、もう一つは、諸外国からの極めて多様な影響にさらされる国民の経験です。ここではルクセンブルクの例を取り上げます。

1) 国境とその変容

フランス革命以降だけでも、仏独の国境は大きく変動しました。1792 年にはじまる対仏同盟戦争の間、ライン川西岸はフランスの革命軍に占領された後、やがて 1802 年に併合されました。一方、ルクセンブルクはフォレ県としてフランス領に編入されました。そして [ナポレオンの敗北後]、1814 年と 1815 年の二つの和平条約により、ザール地方とザールブリュッケンは、バイエルン領とプロイセン領に復帰します。さらに [普仏戦争を経て] 1871 年にドイツ帝国に併合された後 (ただし、国際法上では「併合」されたのではなく、敗戦後の和平条約にもとづいて「割譲」されたことになっていますが)、アルザス・ロレーヌ地方は 1918 年にフランス領に復

www.memotransfront.uni-saarland.de.

⁹ Aleida Assmann, *Erinnerungsräume. Formen und Wankungen des kulturellen Gedächtnisses*, München 1999. これらのカテゴリーに関

する踏み込んだ議論としては、すでに引用した「越境的記憶プロジェクト」(projet memotransfront) に寄せた拙稿の序論 («Saar-Lor-Lux-Vernetzungen in einer europäischen Kernzone», 仏訳あり) を参照。

帰しました¹⁰。同じ時期に創設されたザール地域は、行政上、国際連盟の管理下におかれ、フランスの強い影響力を被ることになりました。しかし、1935年の最初の住民投票の結果、すでに第三帝国になったドイツに復帰します。1940年、ナチス・ドイツはアルザスとロレーヌ北部を占領し、この地域の併合に乗り出しました。しかし、1945年になると、フランスによる新たな占領期がはじまります。とりわけザール地方は、1947年に経済や関税などの面でフランスに取り込まれましたが、政治的な自治権に制限が加えられるなど、問題含みでした。1947年、フランスの占領下におかれた他の地域は新生ドイツ連邦共和国に復帰します。そして、1955年の第2回住民投票で、住民たちが西ヨーロッパ連合の下での独立に反対した結果、1957年から59年にかけて、ザール地方は政治的にも経済的にも完全に西ドイツに統合されたのです¹¹。

このように国境地域の歴史は、たいへん複雑です。支配者の交代は、当然のことながら、つねに熾烈な紛争を引き起こしましたが、同時に、さまざまな行政機構（そして経験）の重なり合いも生み出しました。これらの行政機構は、そ

れぞれの国の法制度に応じて異なっていました。が、しだいに重なり合っていたのです。とりわけザール地方の場合、紛争に満ちた過去を背景に数多くの独仏の協力機構が姿を現し、来るべきヨーロッパの構築を推進する原動力となっています。

新しい支配者は、まず国を掌握しようとしませんが、實際上、それは非常に両義的な状況を生み出します。なぜなら、すべてを廃棄するのでもないかぎり、いかなる支配者といえども、既存の制度を無視するわけにはいかないからです。たとえば、アルザス・ロレーヌ地方の全域に敷かれた建築ルールにも、このことは見て取れます¹²。しかし、それだけではありません。ストラスブールでは、ナポレオン三世とオスマン知事が打ち出した方針にもとづいて地元の建築家たちが都市の大改造計画を立案しましたが、こうして第二帝政下で準備された都市計画の大半が[第二帝政が崩壊した]1871年以後も継続して実行されたのです。当時のパリでは、大きな幹線道路や環状道路が整備され、ルーブル宮のような歴史的建物（フランスの歴史王朝の宮殿であり、ナポレオン以来、美術館となった）に沿って配置されました。また、現代芸術のシンボルとして大オペラ座が建築されるとともに、大きな並木道によってルーブル宮に接続されました。さらには、同時代の技術を駆使した東駅

¹⁰ 以下の古典的な文献を参照。François Roth, *La Lorraine annexée (1870-1918)*, Nancy 1976.

¹¹ 論争に満ちたこの地方の歴史研究としては、以下を参照。Rainer Hudemann u. Armin Heinen in Zusammenarbeit mit Johannes Großmann u. Marcus Hahn, *Das Saarland zwischen Frankreich, Deutschland und Europa 1945-1957. Ein Quellen- und Arbeitsbuch*, Saarbrücken 2007. また、戦後の占領政策一般に関しては、次の文献を参照。Rainer Hudemann, « L'occupation française après 1945 et les relations franco-allemandes », in: Marie-Bénédicte Vincent (dir.), *La dénazification*, Paris 2008, pp. 189-210 et pp. 343-347.

¹² Rolf Wittenbrock, *Bauordnungen als Instrumente der Stadtplanung im Reichsland Elsaß-Lothringen. Ein Beitrag zum Interferenzproblem im deutsch-französischen Grenzraum*, St. Ingbert 1989.

などの施設が建設され、パリの南に位置する天体観測所に接続されました。

「ドイツ領」ストラスブールでも、この同じ方針が採用されました。ストラスブール改造の時期は、1856年に開始された近代ベルリンの建設とも概ね合致しています（ベルリンの場合、プロイセン諸侯の古い都市計画の伝統に、オスマン様式の建築が部分的に導入されました）。これを私は「プロイセン人によるストラスブールのオスマン化」と呼んでいます¹³。ただ問題は、ストラスブールの改造計画が「プロイセン人」によって推進されようとしたことでした（「プロイセン人」という言葉は、あらゆる地域出身のドイツ人を指す言葉として当時用いられていました）。当時の都市は狭く、不衛生だったため、ヨーロッパ全土の知事たちは、都市の発展を阻害していた古い城壁の撤去を大いに歓迎しました。ところがストラスブールでは、街の古い城壁の取り壊しはアルザスの魂に対する「プロイセン」の攻撃であると、地元住民に受けとられたのです。そして、この出来事は長くそのように記憶されることになりました。ところが今日、私たちは新たな状況の到来に直面しています。ドイツ時代の遺産（たしかに重々しい建築様式なのですが）をストラスブール市が受け入れようとしているのです。これはメッツ市に即して

見たのと同じ現象です。2007年、日本の新幹線にあたるフランスのTGVの開通に合わせて、ストラスブール駅は未来志向の建築様式に改築されましたが、このことは記憶が深いところで変容していることを示唆しています。過去が人々により、自覚的に引き受けられようとしているのです¹⁴。

しかし、このモニュメンタリズム建築の受容のプロセスと並行して、もう一つの対立が起きていました。それは一見、目立たないながら、確実に進行していました。19世紀末のオーストリアとドイツでは、プロイセン様式にせよ、オスマン様式にせよ、いわゆるモニュメンタリズム建築に対する反対運動が一部の建築家の間で起こっていたのです。その主体は、さきにメッツ市にふれた際にでてきた都市工学者たちで、彼らは「美学派」または「芸術派」と呼ばれていました。ストラスブールの地元住民たちは、ドイツ出自のこの都市概念を武器に、オスマン様式の都市計画を推進しようとするドイツ行政当局に対抗したのです。その攻防は住民たちの勝利で終わりました¹⁵。1913年から今日にいたるまでのストラスブールの外観を見ればわかるはずです。街が外側（20世紀の初頭に建築され、現在はEU関連の機関が立ち並ぶ東側の地区）

¹³ 政府による当時の壮麗な建築物としては、次の文献を参照せよ。Klaus Nohlen, *Baupolitik im Reichsland Elsaß-Lothringen 1871-1918. Die repräsentativen Staatsbauten an dem ehemaligen Kaiserplatz in Straßburg*, Berlin 1982. また、次の著作には、数多くの地図や写真が収録されている。Georges Livet/Francis Rapp (dir.), *Histoire de Strasbourg des origines à nos jours*, Strasbourg 1982 e.a.

¹⁴ 具体例としては、たとえばストラスブールの美術館による大規模なイニシアチブを挙げることができる。Rodolphe Rapetti (dir.), *Strasbourg 1900 - Naissance d'une capitale*, Strasbourg 2000.

¹⁵ Annette Maas, «Stadtplanung und Öffentlichkeit in Straßburg (1870-1918/25). Vom Nationalbewußtsein zur regionalen Identität städtischer Interessengruppen», in: Christoph Cornelißen, Stefan Fisch et Annette Maas, *Grenzstadt Straßburg. Stadtplanung, kommunale Wohnungspolitik und Öffentlichkeit 1870-1940*, St. Ingbert 1997, pp. 205-275.

に向かって広がるに連れて、ますますメッツ市のような、こじんまりした美しい街並みに変容していくのです。したがって、ここにあるのはメッツ市とも別のモデルです。メッツ市の郊外では、地区全体が「美学的都市計画」の理論のもとづいて建設された区域と「オスマン様式」の幹線道路が並存していましたが、ストラスブルールでは、同じひとつの地区が、モニュメンタリズム建築を主体とする区域から「美学的」様式の区域へと変容する様子が伺えるのです。

要するに、地元住民たちはアルザスの魂を守るために、ドイツ製の武器でドイツ人と闘ったこととなります。ここに見られるのは、「共有された記憶」(*une mémoire partagée*)でもなければ、「分断された記憶」(*une mémoire divisée*)でもなく、「もつれた越境的記憶」(*une mémoire transfrontalière enchevêtrée*)とでもいうべき現象です。ここでは集会的記憶のナショナルな核が見えなくなるほど、さまざまな記憶がもつれ合っていますが、学問的に分析していけば、一本一本の糸がはっきりと識別できるはずです。

2) ルクセンブルク

——トランスナショナルな影響が 錯綜する空間としての国民国家¹⁶

近年ルクセンブルクでは、ピエール・ノラの仕事に触発されて、自国の記憶の場に関する大規模な調査が行われてきました。そこでは、過去の表象の変遷や、特定の場所をめぐる記憶の

ダイナミックな変容に焦点が当てられました¹⁷。こうして先鞭がつけられた学術的議論は、しだいに「ナショナルな枠を超えて」国際的な枠組みへと拡大しつつあります¹⁸。

以下では、この問題に関する一つの異なったアプローチを試みたいと思います。というのも、ルクセンブルクの例は、アルザスやロレーヌなどの例とは、まったく異なるタイプの記憶の重なり合いを示しているからです。問題の核心にある複雑さを認識するために、まず、ルクセンブルク史のいくつかのポイントを確認するところから入りましょう。

- 18 世紀までルクセンブルクの上流階層はフランスを志向しており、言語の面でもフランス語が使用されてきた。一方、庶民たちの間ではドイツ語の方言が話されてきた。その結果、社会階層の分断に対応するように、フランス語とドイツ語方言の言語境界線が領内にはりめぐらされた。
- 1684 年～1698 年、フランスの占領。
- 1700 年～1711 年、アンジュ家に帰属。
- 1711 年～1714 年、バイエルン侯に帰属。
- 1714 年～、まずスペイン領オランダ、次い

¹⁷ Sonja Kmec/Benoît Majerus/Michel Margue/Pit Peporte (dir.): *Lieux de mémoire au Luxembourg. Usages du passé et construction nationale. Erinnerungsorte in Luxemburg. Umgang mit der Vergangenheit und Konstruktion der Nation*, Luxembourg 2^e éd. 2007. 同書には、図版や挿絵が豊富に収録されている。とくに以下の二人による理論的イントロダクションを参照されたい。Michel Margue/Sonja Kmec, « Les Lieux de mémoire, ou Donner un sens à l'histoire », *ibid.*, pp. 5-14.

¹⁸ Benoît Majerus/Michel Margue (dir.), *Nationale Erinnerungsorte hinterfragt. Neue methodische, interdisziplinäre und transnationale Ansätze - Dépassez le cadre national des «Lieux de mémoire». Innovations méthodologiques, approches comparatives, lectures transnationales*, à paraître en 2009.

¹⁶ 手ごろな概説書としては以下を参照。Gilbert Trausch, *Histoire du Luxembourg*, Paris 1994.

でオーストリア領オランダの属領となる。

- ー 1795 年、フランス革命勢力による併合。ルクセンブルクは再びフランスの影響下におかれる。とりわけフォレ県では、1814 年までナポレオン式の行政制度に組み込まれる。したがって制度によっては、まもなくベルギーとして独立する地域に導入されたものと、ほぼ同じものが施行された。
- ー 1815 年、ウィーン会議の結果、ドイツ連邦の一員でありながら、オランダに属する大公国となる。
- ー 1830 年、ベルギー革命に触発されて、ルクセンブルクでも自治に向けた動きがはじまる。このときルクセンブルクの地方が言語境界線に沿ってベルギーとオランダに分割され、今日の国境線が形成される。
- ー 1839 年、オレンジ=ナッソー家が個人所有する大公領として、遅ればせながら自治権を獲得。国民国家として誕生する。
- ー 1842 年、ドイツ関税同盟への加盟により、経済が躍進。
- ー 1867 年、ナポレオン三世がルクセンブルクを買収しようと試みるが、プロイセンの介入により、頓挫する。以降、ルクセンブルクは永世中立国となる。
- ー 1871 年、ドイツ帝国がヴィルヘルム=ルクセンブルク鉄道の行政権を取り戻す。

19 世紀はヨーロッパ各地で国民国家が誕生

した時代ですが、ルクセンブルクという国は、まさにヨーロッパの交差点のような場所に位置して国民形成をしなければなりません¹⁹。したがって、先行する数百年の間にルクセンブルクに一時滞在しては、過ぎ去った諸外国の制度や伝統を、さまざまな領域で取り入れて行ったのです。こうして、ゆっくりと一つの全体が形作られ、やがて 20 世紀のルクセンブルクの人々により、国民的アイデンティティの核とみなされるようになる要素が形成されました。諸外国の影響は、部分的に並存している場合もありますが、しばしば相互に複雑に絡まり合っています。そして、それらは今日でも、教育制度から都市の外観や構造、法制度、経済的な相互浸透にいたるまで、さまざまなレベルで観察できます。

たとえば、プラトー・ブルボンの石材建築の例を挙げることができるでしょう²⁰。プラトー・ブルボンとは、ドイツ連邦時代の要塞が 1866 年に取り壊された後、南の旧市街から、1907 年に建設されたルクセンブルク駅に向かって広がるエリアです。ここに見られる多様な建築様式からは、或る国民国家の特殊な形成史

¹⁹ Calixte Hudemann-Simon, *La noblesse luxembourgeoise au XVIII^e siècle*, Paris/Luxembourg 1985.

²⁰ 美術史の観点からは、次の文献を参照。豊富な図版や挿絵が収録されているほか、国際的に活躍していた当時の建築家たちの職業的軌跡を詳しくたどることができる。Antoinette Lorang, *Plateau Bourbon und Avenue de la Liberté. Späthistorische Architektur in Luxemburg*, Luxembourg 1988. ルクセンブルク市の変遷全般に関しては、次の文献を参照。Gilbert Trausch, *La ville de Luxembourg. Du château des comtes à la métropole européenne*, Anvers 1994. この本には、当時の地図や図版が数多く収録されているが、版權の都合上、この論文で引用されるほかの文献の場合と同様に、ここに再録することができない。

が読み取れます。ルクセンブルクという国は、ほかのヨーロッパ諸国から持ち込まれたモデルが幾重にも重なり合いながら形成された国家なのです。ここで花開いたのは、ヨーロッパ各地に広がった歴史主義の様式ではありません。そのいい例としては、「自由通り」(オスマン様式の幹線道路)の中央に構えているアルセロ・ミッタル社(インド、フランス、スペイン、ドイツ、ルクセンブルク資本からなる巨大鉄鋼企業)の建物が挙げられます。1920年代にアルベッド社(アルセロ・ミッタルの前身)の本部として建てられたこの記念碑的な建物には、フランスの17・18世紀の装飾がふんだんに使われています【写真⑦、⑧、⑨】。

こうして、17世紀以来、ルクセンブルクという国の司法・社会・政治機関を作り上げてきた諸外国の影響が、道路の形態から建物の装飾にいたるまで、このエリア全体に色濃く反映されているのです。たとえば、アルベッド社の斜め向かいのホテル・モリターには、フランスのオスマン様式の影響が伺えます。その隣はベルギー様式の建物ですが、フランスの影響も見られます。さらに一軒先もベルギー様式の建物ですが、こちらはずっと飾り気のない、フランドルのレンガ造りです【写真⑩】。この地区が開発された第一次大戦前夜には、ドイツの影響はすでにだいぶ小さく、辛うじてユーゲント・シュティール様式の建物が街の中央通り沿いに一軒あるだけです【写真⑪】。ドイツ様式の建築物なら、

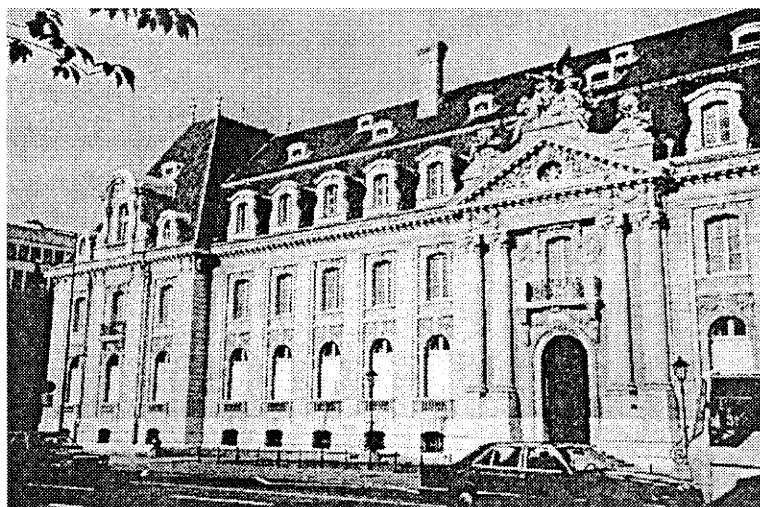
ほかにも大学のある北部のリンペルツベルク地区にも数軒見られます。そして、旧市街に通じる西側の橋頭堡の位置には、旧ヴィルヘルム＝ルクセンブルク鉄道の建物があります。1952年以来、欧州石炭鉄鋼共同体(CECA)の本部が置かれているこの建物の外面は、ドイツ帝国期のベルリン様式で作られています。一方、その東側にある貯蓄銀行は、イタリアのネオ・ルネサンス様式の建物です【写真⑫a、⑫b、⑫c】。このエリア全体に整備された道路に関しては、オスマン様式と美学的都市計画の二つが交互に入れ替わったり、重なり合ったりしています。

1866年以前は軍事基地だった、このエリアの開発の紆余曲折に注目すると、かつてルクセンブルクが帰属した主要な国々やその行政組織を作り上げた諸国の影響が、さまざまな側面に反映されていることがわかります²¹。ほかのヨーロッパ諸国と比較したとき、このように隣国のモデルを巧みに組み合わせてきた点が、ルクセンブルクという国民国家の特徴ではないかと私は考えています。それが織り成す全体は、「分断された記憶」や「共有された記憶」などのカテゴリーに収まるものではありません。しかし、それはまだ自覚的に捉え返された「ヨーロッパ的記憶」でもありません。ここでいう「ヨーロッパ的」なるものは、第二次大戦後、EU関連

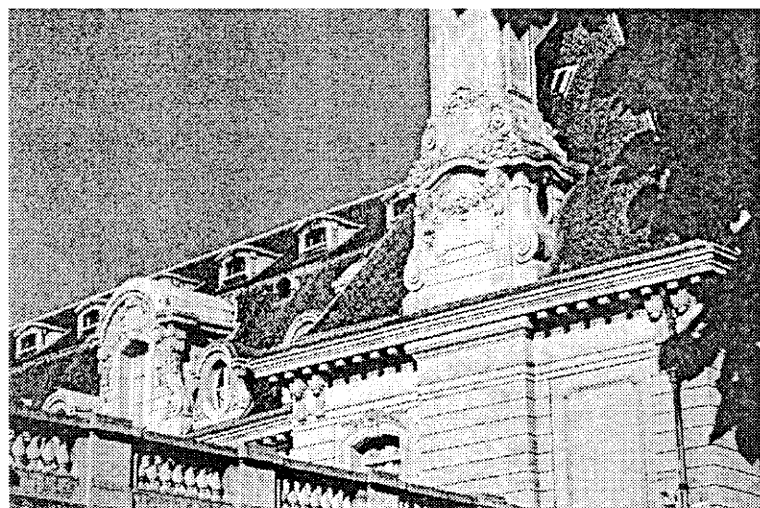
²¹ 建築ルールの変遷に関しては、以下の文献を参照。Rolf Wittenbrock, «Baurecht und Stadtplanung im Spannungsfeld unterschiedlicher Interessen und Orientierungen: Die Stadt Luxemburg im 19. Jahrhundert», in: *Hémecit. Zeitschrift für Luxemburger Geschichte/Revue d'Histoire luxembourgeoise*, 42 (1990), pp. 373-405.

の建物が林立するキルヒベルク地区のモダンな建築様式のうちに表現の場を見いだしました。これに対して、ルクセンブルク市の中心部で見られるのは、むしろ「入れ子状態の記憶」(une *mémoire imbriquée*) なのです。この場合、ナショナルなものはさまざまな要素の絡まり合いか

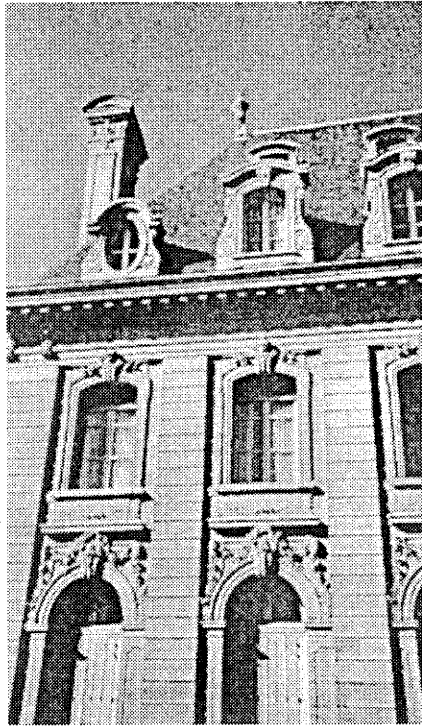
ら成り立っています。たしかに一つ一つの要素はナショナルな性格を失いながらも、それらが織り成す全体として「ルクセンブルクらしさという」ナショナルなものを体現し続けているのです。



写真⑦：ルクセンブルクの「自由通り」にあるアルベッド本社（今日のアルセロ・ミッタル）の正面



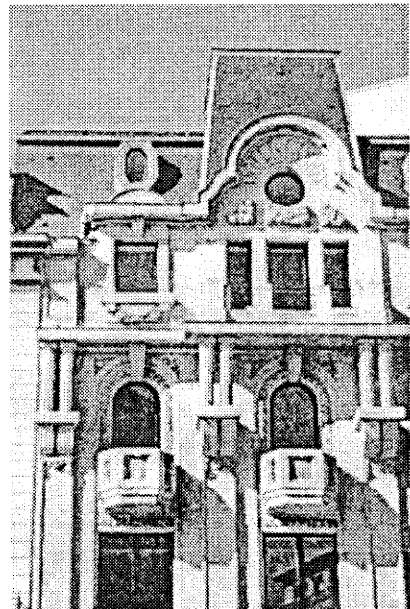
写真⑧：アルベッド本社のマントルピース



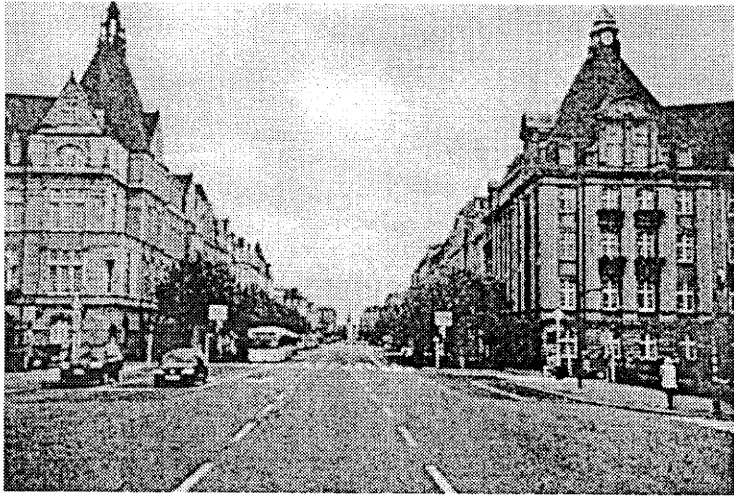
写真⑨：アルベッド本社の丸窓



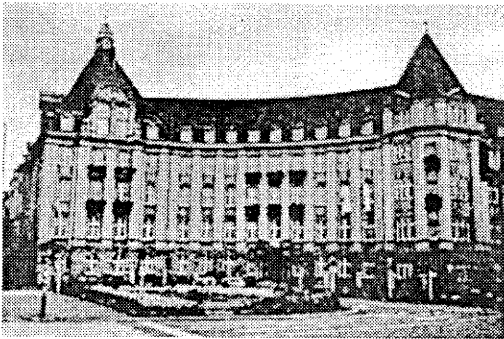
写真⑩：ホテル・モリターとその近隣の建物



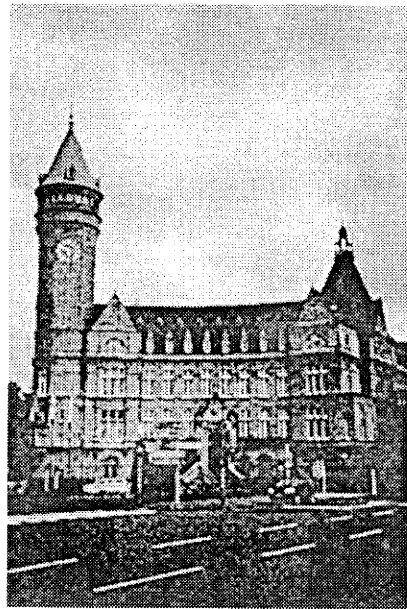
写真⑪：「自由通り」にあるホテル・グラーフ



写真⑫-a: ルクセンブルクのアドルフ橋（「自由通り」の中ほど）から、
南方の貯蓄銀行とウィリアム・ルクセンブルク鉄道への眺め



写真⑫-b: ウィリアム・ルクセンブルク鉄道



写真⑫-c: 貯蓄銀行

III. 越境的記憶の要因

以下では「越境的な記憶の場」を生み出している要因をいくつか抽出して、体系的に整理してみましょう²²。

1) 支配

政治支配者の交代は(それが戦争や国際条約、あるいはほかのどんな出来事に由来するものであろうと) エティエンヌ・フランソワが「共有

²² すでに引用したインターネット上の「越境的記憶」プロジェクトに寄せた序論（2002年）で、このような体系的な分析を試

みたことがある。

された記憶」や「分断された記憶」と呼んで本誌で分析している現象を生み出す大きな原因の一つです。しかし、特定の状況の下、しかもとくに国境地域では、それは一層複雑な帰結をもたらすことがあります。たとえば、新しい法体制が施行される場合も、新体制は以前からの古い制度を考慮に入れられないわけにはいきません。こうして異なる法体系が幾重にも折り重なる結果、しばしば解きほぐすことができないようなもつれが不可避的に生み出されるのです。

2) 国民国家

——トランスナショナルなものの帰結

ルクセンブルクの例は、とても異なったナショナルな文化や伝統の重なり合いや統合過程を通じて、しだいに新しいナショナル・アイデンティティの核が形成される場合があることを示唆しています。ルクセンブルクの領土の小ささゆえに、越境的なものは、ここで独特の役割を演じます。しかし、近隣諸国やもっと遠くの国の影響を取り入れてきたルクセンブルクの歴史を体系的に分析すると、越境的なものは、大国の狭間の小国に限定された現象ではなく、ずいぶん異なった、もっと上位のレベルにおいても起こりうる現象であることが見えてきます。

3) 支配と住民

現地住民の支配政策もまた、多様な側面をもつ要因の一つです。ドイツ領エルザス＝ロートリンゲンの構想は、ドイツへの完全なる同化政

策だと一般に考えられがちです。しかし、この20年の研究はもっと複雑な現実を浮かび上がらせました。住民の支持を獲得する上で、正面衝突は最良の方法ではありません。実際、ドイツ帝国の支配原理は時代とともに推移し、半世紀のうちに、現地住民に対する懐柔政策を支持する人々が大勢を占めるようになりました。一例を挙げましょう。メッツの大聖堂を修復する際、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世は、配下の建築家たちをフランスに派遣し、ドイツ様式ではなく、フランスのゴシック様式で修復させました²³。しかも皇帝は、このフランスの（したがってカトリックの）大聖堂が最も高い建物としてメッツ市にそびえ立つことを容認しました。実際、皇帝みずからが設計に携わり、モーゼル川の島に建設させたプロテスタントの寺院は、大聖堂よりも低いのです。ここではドイツ様式は強制されず、支配地域の伝統が尊重されました。1871年以後のアルザスやロレーヌ地方の諸都市における建築ルールの歴史にも、同じ配慮が伺えます²⁴。

4) 近代化

ヨーロッパにおける国民国家の形成は、一九世紀に最盛期を迎えました。そして、それにと

²³ Niels Wilcken, *Architektur im Grenzraum. Das öffentliche Bauwesen in Elsaß-Lothringen 1871-1918*, Saarbrücken 2000, p. 304; (仏訳: Niels Wilcken, *Metz et Guillaume II: L'architecture publique à Metz au temps de l'empire allemand (1871-1918)*, Lorraine 2007)。

²⁴ 以下の文献を参照。Rolf Wittenbrock, *Bauordnungen als Instrumente der Stadtplanung im Reichsland Elsaß-Lothringen. Ein Beitrag zum Interferenzproblem im deutsch-französischen Grenzraum*.

もなって、ヨーロッパ諸国は日常生活の環境をどう整備するかという共通の課題に直面しました。たとえば、1871年以降のドイツにおける人口増大や農村からの都市への移動は、フランスよりもはるかに急速に進みました。そこで、ドイツでは、都市住宅などの分野で、新たな発想を積極的に取り入れ、実現していく必要があったのです。この時代に建設されたベルリンの「ミーツカゼルネ（兵舎式集合住宅）」は、今日では典型的なナショナルな「記憶の場」の一つでしょう。ストラスブールのドイツ地区にある大きな建物には、その影響が見られます。しかし、トランスナショナルなレベルでは、こうした技術・発想面での進歩はヨーロッパ諸国の間に大きなズレを生み出しました。そして、この格差そのものが新しい発想や技術の成果が国境を越えて各地に伝播していく大きな原動力となったのです。

5) 職業化とコミュニケーション網の発展

これらの要因は、近代化と密接に関連していますが、体系的な分析の際には、相対的に自律した要因として扱う必要があります。都市計画の専門家や都市工学者、地域の建築家などの新しい職業に注目してみましょう。これらは当時成立した大きな職業分野の一つにすぎませんが、これに従事する人々は、もちろんナショナルなモデルにだけもとづいて仕事をしているわけではありません。現代の東京はその最良の例の一

つですが、1900年前後のヨーロッパでも同様でした。都市工学者たちはヨーロッパ各地を訪ね歩き、(専門家または一般向けの)大きな国際博覧会を訪れたり、ドイツの「社会政策学会」(Verein für Socialpolitik)のような専門家のシンポジウムに参加しました²⁵。こうして、ある国で発案された都市計画や建築モデルは、他国に伝達される過程で変容を繰り返しながら、もとのモデルとは比較的に独立した形で普及していったのです。たとえば、田園都市のモデルもそうでした。これは当初、20世紀初頭のイギリスで一つの社会モデルとして構想されましたが、ドイツでは企業が行う社会政策の一環として導入された結果、労働者街の形をとりました。またハンガリーでは、ブタペストのヴェケルレ地区のように²⁶、カルパチアの建築様式と西洋建築を融合させる形で発展し、さらにアルザスでは、ドレスデン近郊のヘレラウ田園都市をモデルにして導入されました。ストラスブールでは、中心街の荒廃した建物を取り壊した跡地に建設される予定でしたが、追い出される住民たちの反発もあり、受け入れられませんでした²⁷。このようにモダンな建築様式がヨーロッパ大陸に広まっていましたが、いずれも近代化という

²⁵ ドイツ社会政策学会は、学者や現場の人間が経験や情報を交わす、とても有意義な場として機能し、議事録が毎年出版された。

²⁶ 以下の文献を参照。Gergely Nagy, *Die Wekerle-Siedlung Budapest*, Budapest ca. 1999.

²⁷ Stefan Fisch, «Der Straßburger "Große Durchbruch" (1907-1957). Kontinuität und Brüche in Architektur, Städtebau und Verwaltungspraxis zwischen deutscher und französischer Zeit», in: Cornelißen (e.a.), *Grenzstadt*, pp. 103-204.

社会の要請に応えるものでした。しかし同時に、それぞれの地域、地方、国家などの異なる条件に適応しながら変容していったのです。

6) 地域意識

とりわけアルザスやロレーヌのように、その地政学的な位置のために苦しめられてきた地域では、地域性の標榜は、住民にとって一種の逃げ道となる場合があります。というのも、地域的なアイデンティティを標榜することによって、大国間のナショナルな対立に巻き込まれるのを回避できるからです。このような態度もナショナルなものの絡まり合いを促進する重要な原動力の一つです。こうしてナショナルなものが受け入れられるのも、その受容の過程で当初のナショナルな含蓄が薄れていくからです。すでに言及したアルザスやロレーヌ地方の法律の変遷は、そのいい例でしょう。そこではドイツ帝国時代の制度が、社会権や教会と国家の関係、都市法などの重要な領域で、今日も生き続けています。ストラスブールでは、ドイツのモニュメンタリズム建築にもとづく都市の改造計画に対して、ドイツ出自のもう一つの考え方にもとづいて住民の反対運動が起こりました。そのとき「アルザス人」という言葉は、地元住民とドイツ移民の二つの社会が合流し、帝国政府（ドイツ）に対して結束する際の、道徳的・市民的な合言葉となったのです²⁸。

7) 社会の防衛

これは第三共和政の初期にオルレアン司教デュバンルーが用いた言葉で、当時共和主義者のガンベッタが「新しい社会階層」と呼んだ勢力の台頭を牽制する目的で用いられました。この「社会の防衛」というブルジョワ階級の思想は、一見ナショナルなものが世の中を覆いつくしていた時代に、トランスナショナルな絡まり合いを促進する、もう一つの原動力となりました。たとえば、「危険な階級」²⁹の台頭を防止するためには、その温床である不衛生な地区を一掃する必要があります。そこで、街の有力者たちは、都市の衛生環境などに関して、従来の国民的伝統にはこだわらず、外国で発明された道具を積極的に採用していったのです³⁰。スイスでは、ブルジョワ階級と都市計画家は同じような理由から田園都市のモデルをと共に推進することになりました。ブルジョワたちが、革命の危険を防止する手立てとして、これを奨励したのに対して、都市計画家たちは、中産階級の生活水準を改善する手段として、その普及に取り組んだのです³¹。

²⁸ Louis Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle*, Paris 1958. この本が刊行されてすでに半世紀になるが、ルイ・シュヴァリエが提起した「危険な階級」の概念は、フランスのブルジョワ階級の心性を理解する重要な鍵であり続けている。

²⁹ Peter Heil, *Von der ländlichen Festungsstadt zur bürgerlichen Kleinstadt. Stadtbau zwischen Deutschland und Frankreich. Landau, Haguenau, Sélestat und Belfort zwischen 1871 und 1930*, Stuttgart 1999.

³¹ François Walter, *La Suisse urbaine 1750-1950*, Carouge-Genève 1994, pp. 412-421.

²⁸ Maas, *Stadtplanung*.

IV. 結論：紛争と競合

ここでご覧いただいたのは、わずかな例にすぎません。記憶の競合や重なり合いは、ほかにもヨーロッパの無数の地域で見られます。中央ヨーロッパなどはその宝庫でしょう。たとえば、ポーランドとオーストリア＝ハンガリー帝国の間に位置するガリツィア地方やポーランドとロシアの間に位置する今日のベラルーシなどの例が挙げられます。ほかに、フランスとイタリアの間に位置するアオスタ渓谷、イタリアとスイスの間のティチーノ州、ドイツとベルギーの間のオイペン＝マルメディー地方、フランスとスペインにまたがるバスク地方などの例があるでしょう。しかもバスク地方の例などは、さらに別なタイプに属しています。

越境的な記憶の歩みから何が見えてくるでしょうか。ここで強調しておきたいのは、紛争や対立の経験は人々をただ分断するだけではないということです。この点で、私の認識方法は「分断された記憶」と「共有された記憶」に関するエティエンヌ・フランソワの議論に非常に近いといえます。ただし、記憶の場と呼ばれるものの大半が、公の意識にしっかりと認知されているのに対して、越境的な記憶の領域はたいいてい埋もれており、それゆえに大きな可能性を秘めているように思うのです。今日の私たちは、地域文化や国民文化を保ちつつも、他者と切り結んでいる関係性について、ますます深く自問せざるをえなくなっています。そんな世界のなか

で、越境的な記憶の領域は、もっと重要な政治的・社会的役割を記憶に与えるかもしれない、新しい意識のあり方をもたらしうるのです。この点から見ると、第二次大戦後、欧州共同体の建設に際して、越境地域出身者が大きな役割を果たしたのは、決して偶然ではありません。たとえば、[欧州連合の創設者とみなされる]フランス外務大臣のロベール・シューマンはルクセンブルクで生まれ、ドイツ時代のロレーヌで育った政治家です。ヨーロッパの建設には、シューマンのほかにも数多くのルクセンブルク出身の政治家が功績を挙げています。また欧州連合といえば、イタリアのアルチーデ・デ・ガスペリの名前も忘れることはできません。デ・ガスペリの場合、当時オーストリア＝ハンガリー帝国の領土だった、現在のトレンティーノ＝アルト・アディジェ州の出身です。このように紛争というものは、越境的（さらにはヨーロッパ的）な意識を芽生えさせ、政治や人間の心性に持続的なインパクトをもたらしうるのです。

たしかに他者との共通の土台となるような経験は、とりわけ国境地域に多く見られます。しかし、体系的に分析してみれば、ここに見られる構造は、何も国境地域に限定されたものではありません。たとえば、大都会の都市計画などの分野で同じような調査を行えば、大きな学問的成果が期待できるでしょう。ローマ、マドリード、アテネ、パリ、ベルリン、モスクワなどの首都や、ナポリ、オスロ、ケルンなどの大都

市で、この二百年來行われてきた都市計画のうちにも、私たちがフランス、ドイツ、ルクセンブルクの国境空間で観察したものと基本的に同じプロセスが進行していることがわかるはずなのです。ただ、それを論じるのは、別の機会に委ねなくてはなりません³²。

(Rainer Hudemann・ザールラント大学)

(きくち けいすけ・東京外国語大学非常勤講師)

【本文中に使用した写真の出典】

写真① photo : Martin Wolff 1988.

写真② Will, *Führer*.

写真③ 1908 年 (Will, *ibid.*) ; 1919-1942 年 (André Schontz, *Le chemin de fer et la gare de Metz*, Metz 1990) ; 1988 年および 2001 年 (M. Wolff/R. Hudemann, Institut d'Histoire de l'Université de la Sarre)。

写真④ アネット・マース氏蔵の 1911 年頃の絵葉書。

写真⑤～⑫c photo : Hudemann 2001.

³² 本稿は 2009 年 2 月 17 日に東京外国語大学で行われた講演に加筆したものである。当日フランス語からの通訳をしていただいた菊池恵介さんと杉山佳子さんに、この場を借りて深くお礼を申し上げたい。